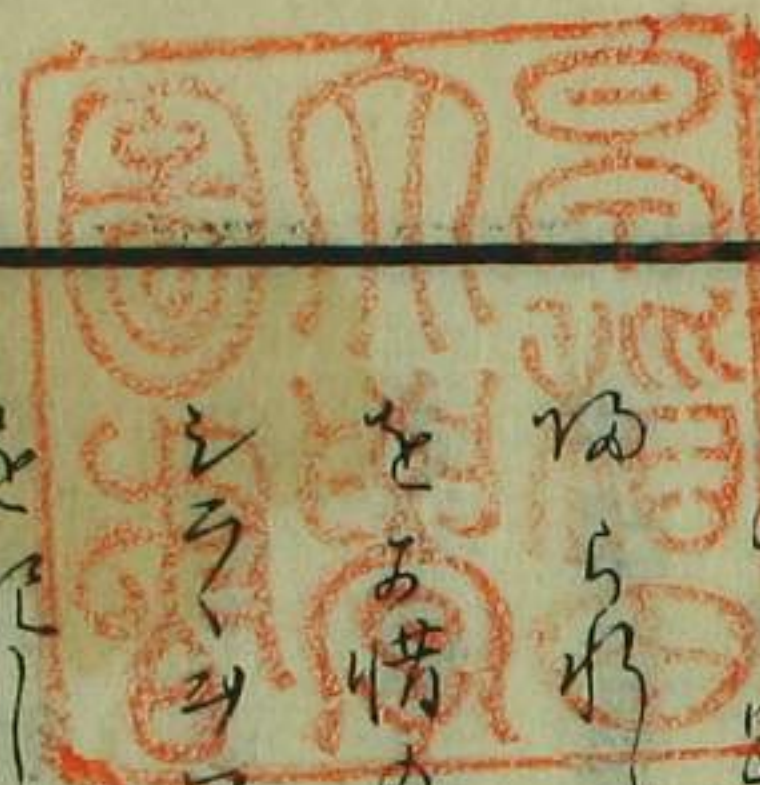


JL 4
268



門 呂 4
號 268
卷



曾我所藏

凡例

茶溪翁先生郷に彼地より平役一クシテコトシテシユシヤ
の心を踏破して東岸ナイブツに虫裏トツツの嶮を探し
ゆらゆら唐太日記てふ書の其奥コトコトタライカの欠る
を事情のゆり自ら西辰千役の記行の中より抜萃して
シラコロコト舟を求めトツツを裁コトコトタライカの行廿余日
を記し一卷とし先生のその及ぶを記しを次毎の如
書極に閑者の傍とらんをまじり余サケ名を大發華魚
留マス魚を小發華魚と云ふ又世間の識者鮫鮫松魚を
用ゆまともそ是非を志すもねも通一易に依註を用ひ

七段長余志

梓新申庚

一名 吃囉伊加記行
遠呂津古記行

北蝦夷餘誌

多氣志樓藏版



又青魚ニレをも 鯉ニレの和字わらうと明く、それをも是を目し、其の
わらうとて草木魚を子とやまはる字を目也

又海軍國画を加ふも我々等の及ぶ迄を知らざらんが
又畧賊家室と聊風を辨つらんを欲するの意之
此書そ尾の巻さうと余函館府に納し、丙辰の記行三十余
巻の中より聊摘記せしむる之を微細を去るべしとあはれし今
世を全閣かりしむる事と安政七庚申の仲春唐太日記
刻版の日に於江戸深川何縁橋の邊

松浦亦江郎誌

北蝦夷餘誌

一名 咤囉伊加 噠呂律古 記行

伊勢 松浦竹四郎著

安政丙辰の春余太田某と同行隊長白山君と扈從、蝦夷の西
岸を巡視し、五月下旬ソウヤ地名と北蝦夷の自主の渡クシユニ區春
古潭コダンに於り、此処より東浦なる富内茶トナイチヤと云ふ越トをより東岸行真
總地名に到り西岸ソシニナイと出ん、此の途次を議するに、東海客を物と索
濱より小舟の通行快晴の時多し、難航し糧食も人亦乏、搬運も
言由依り城へ人員を減し出立せん、の件決し、惣習士余拾人、定り
隊長一牧の規條を出れ、喰糧も物も都々のと儉し、旅装も

一 装束は伴天股引下着袴履宜羽織笠三日月相油草鞋を履く
つくろひ

伴天股見立用羽織袴一付入一枚
自分用意也

一 茶碗一箸一俵箸懐中巾一枚手袋茶巾

一 燭竹火繩樽附木火口用意也

一 小鍋二茶罐一用意也

一 鉈二本同繩挑灯ホ源左吏持糸也

一 源左吏事手文庫経柳行李一持糸鐵盤量尺紙筆ホ内用意也

一 夫立子拭火打扇子足袋茶巾湯桶用意也

右外毎月糸印持越へかき置也

と余も席をとり獨り山道地を越すナイブ地ホ出奥ヲ口地ヨコ地ク地ラ

イカ地の二種夷の地を巡視せん王城をく隊長是をゆき依て六月

五日先人其の老を定む事、尚所熱中使ツウ名とロイ名のアカラ名

カ余兩午の暮れ地まで歩けり事も有る故に是を乞ひ文餘を文

配人の意に任す其出ま処をタコイ地のモシキ名ウエゴ名のヲケ名ノ名

カラ名カシユ名ヤ越の事を能く案内のり又シラ名ヲロ名のウイキ名カ

カ二種名夷の地を案内の老とて出れば行熱容易の事なりこれ

喰物も土産の奥取草根ともに其地の物を喰ひ旅心静を安んずり

一 囊の米と一梳の塩を齎し行勇れ 処を宿と定めり

七日出立しシユ名ヤ名山越名ナイ名フ名ホ出立名シラ名ヲロ名カシユ名カ

運上屋を出立しシユ名ヤ名小舟名ヨコ名リ名是より山乃

タコイ^地に出るより小舟をナブツ^地に下り海をまじシラヨ^地に陸行
のころ茶^名は^名富小徳^名より一^名の^名畠^名の^名名^名

十四日^快晴シラヨ^地の^名クロス^名人^名と^名志^名の^名妻^名ハ^名カ^名イ^名カ^名の^名産^名を^名て^名取^名

度^名の^名クロス^名人^名を^名彼^名地^名に^名行^名し^名て^名あ^名る^名故^名に^名先^名を^名教^名へ^名夫^名船^名一^名艘^名を^名備

へ^名て^名乗^名出^名候^名に^名此^名前^名灣^名を^名出^名て^名海^名の^名字^名に^名教^名示^名せ^名れ^名子^名一^名枚^名を^名凡

四十^名丁^名を^名行^名つ^名也

真^名纏^名の^名前^名に^名到^名る^名言^名に^名川^名有^名を^名ハ^名丁^名斗^名ル^名也^名ヲ^名ハ^名マ^名シ^名ト^名イ^名フ^名也^名

甲^名寅^名の^名一^名兩^名輻^名軒^名使^名建^名立^名の^名床^名を^名出^名の^名社^名の^名有^名る^名を^名下^名小^名船

を^名以^名て^名土^名人^名等^名一^名柄^名の^名エ^名ナ^名ヲ^名林^名帯^名を^名作^名る^名

行^名ふ^名の^名不^名得^名を^名裁^名し^名を^名志^名る^名浪^名の^名一^名を^名隔^名る^名を^名限^名り^名も^名せ^名ん

と^名崎^名腰^名一^名を^名志^名る^名一^名玉^名垣^名と^名建^名添^名載^名一^名方^名の^名事^名も^名祈^名り^名出^名て^名ト

輪^名荒^名ハ^名千^名ト^名カ^名シ^名千^名里^名ク^名シ^名エ^名シ^名ト^名イ^名フ^名岬^名を^名出^名る^名ト^名イ^名フ^名

千^名カ^名ロ^名シ^名ナ^名イ^名地^名小^名若^名る^名此^名處^名夷^名家^名二^名軒^名イ^名サ^名エ^名コ^名カ^名リ^名と^名上^名陸^名一^名風^名筋

を^名見^名合^名せ^名ま^名す^名一^名柄^名の^名削^名花^名を^名作^名る^名其^名柄^名一^名

・あ^名や^名う^名も^名立^名志^名る^名浪^名一^名船^名に^名突^名岬^名の^名磯^名の^名風^名を^名待^名つ^名

と^名志^名る^名一^名波^名底^名に^名投^名り^名て^名一^名餘^名情^名を^名流^名し^名投^名出^名れ^名也^名ト^名イ^名フ^名ト^名

タ^名シ^名ノ^名ワ^名と^名イ^名フ^名岬^名一^名の^名大^名岩^名を^名種^名の^名水^名を^名の^名群^名居^名に^名エ^名ト

ヒ^名リ^名カ^名の^名一^名群^名居^名を^名土^名人^名等^名指^名示^名し^名て^名あ^名ら^名は^名し^名何^名處^名に^名行^名く^名何^名處^名に^名行^名く^名

来^名り^名い^名處^名と^名シ^名ト^名コ^名の^名二^名處^名を^名以^名て^名又^名津^名附^名と^名イ^名フ^名何^名處^名に^名行^名く^名飛^名鳥^名等^名

其^名餘^名種^名の^名見^名馴^名れ^名る^名も^名あ^名れ^名も^名洪^名清^名と^名漂^名つ^名れ^名舟^名先^名を

多摩川下流



冥岫岳

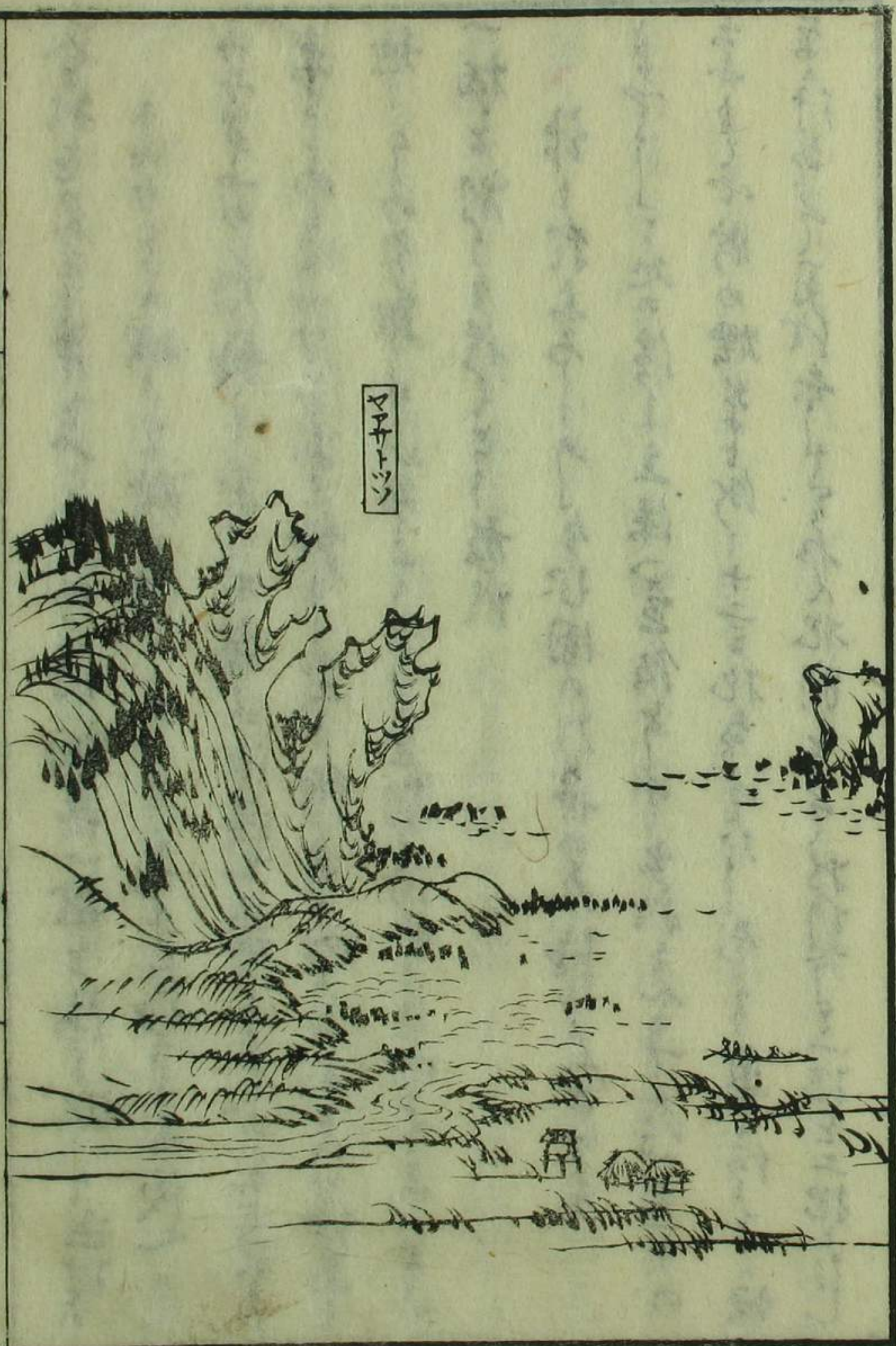
あまのうらた
けさかたのうら
とつねはて
ふくまはさき
ふくまはさき
ふくまはさき
ふくまはさき

冥岫岳



ンダコシクマ

マサトシ



全形をうんま車をよお人等一同烟草一摺を海に投ぐるに丁六
トツワとを城と断崖とを先と後と云々の
ウテナイナウシ共城とボリホウの沙濱之上陸と土人の云々
東と西とトツワをあら城と玉と新島と入る者トツワ海
越しとあり難しとい知るエナヲを削り山と手向と云々
一柄を削りて行そと云

● 津と於志る一り、今む國のたせの為城と人の心と
とまゝ一と此の傍に立深一五飯とて出船とてするにツクニウの
云ふも七野の煙草と例と十二把とてなり是より奥と例と云々
茶汁とて月夜希とてわく把別とておけへ一把を二把とし

あつく是より十イサラキ此ニシテルウ系計ヲチヤラセナイ決ヤウコルトイ
イカラウシ海とてマリンコタンと名を
東向濱取とて丸石大岩岬甚而一湾を有川有鮭 鮎院
多々中々フスラのお人イウウの情カリを連々出稼を以川魚
類の多々とい我々体も男々六七千尾を捕りて船に積り
しりも子セツ前と思ふも船りの夫名心りてわかれは是れ又フ又フ
ナクとも出船もに丸石大岩岬ヤサツツ岬と申す
火焰の如き岩岬と申す計を也とて積りては子ホウトツワ
トツツ名地インカルシ名地つりては岩壁と申す
たり凡二里半と云ふは凡二十余間も思ふとてお手紙の物とて

傍に雌雄の熊兎を連ねて捕らるる人等是を名とす
 弓の箭をつひて白熊を射たるに權の者も熊を射るに
 射るに歸一放ちて一箭も射るに權の者も熊を射るに
 寄り鯨を引くも色息氣近く不陸にゆく表裏中へ喰らる
 とも思ふれも好此をこり金鳥も西山へ傾き少く晴く
 後ろの方より胡沙隠れ一輪の月より出たり名と其史
 捨りてホヤンケー名地マトウシナイ名地ニイラシケウ名地フレキ名地アカラ名地イコ
 モシ等を裁く後マクシコタンフヌツラ名地名史
 あり鯨の子を氷海始に洪濤の島に破れて中同に打ち
 死にて四五日経るるに休む必き昔友小島あり之

此処人家曰新アイカアイノイホウノヲノコトイシニコクサ小石濱之お人等何れも外へ
 漁へ行くとて皆明屋に如く出所を靴と水筒を多
 ども川魚を至るに食なりとや物とトツ岬より南に皆ト
 彼従ま水も此処より其を風信多くタイカに靴古
 多く山靴の物を司之扱て一宿に夜半頃より白雨頻り
 ありて椀皮等の根を処へ漏りて寐るるも旅難きなり早
 度一帰りの糧と塩を測り星舟を岩に曳揚る
 十五日一回の雨用意して出立するに是より海舟熱て
 一團二團もろろ寄り本多打上る間よりライムニキナ類ホラヤ
 キナ若黄茶の種也名替蓋より分け経る東風吹りて

萬里單身輕
似萍飄越海
暫停船地
北去天河遠
修竹摩牛
織女星
本川初稿



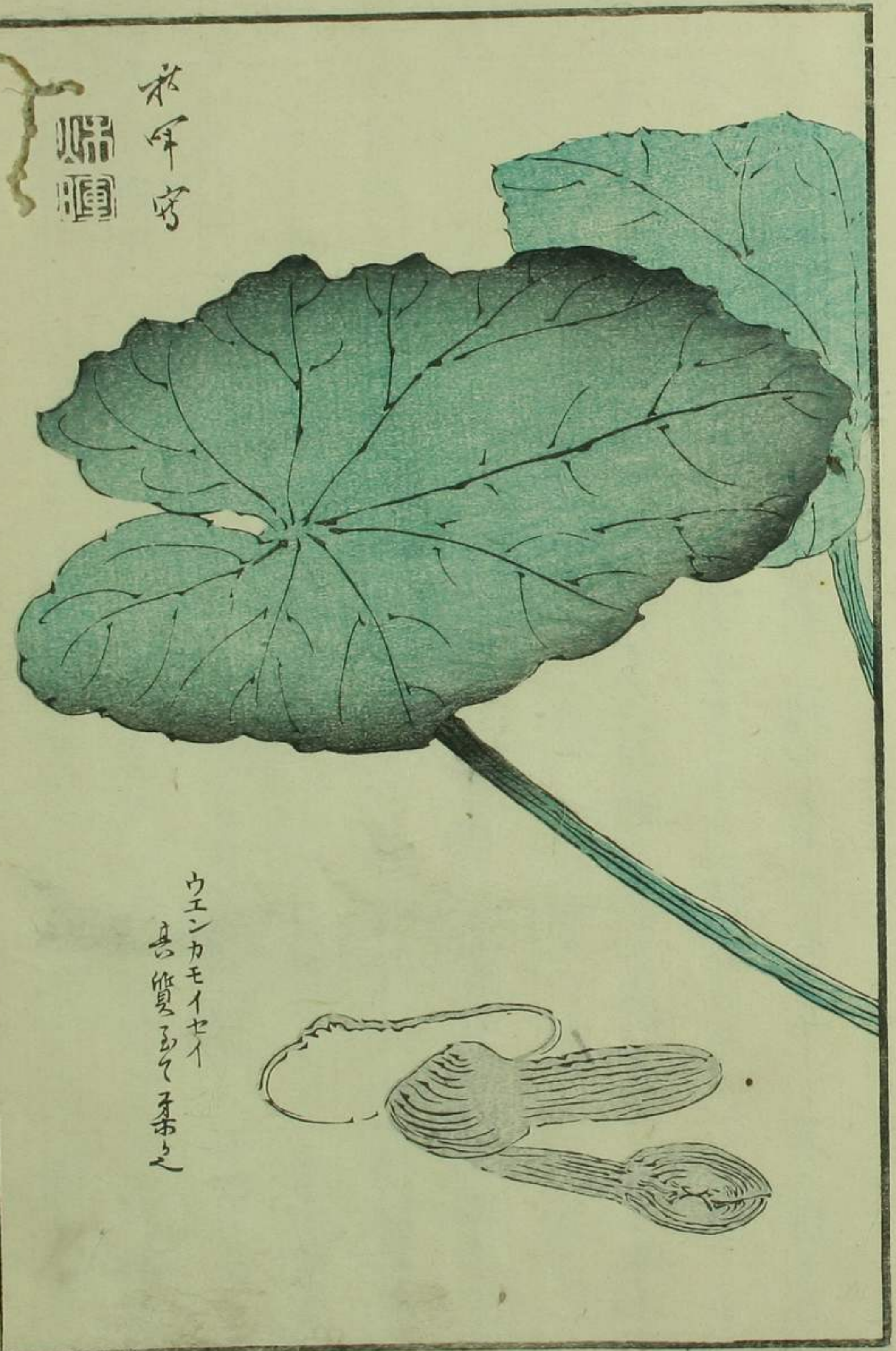
庚申夏七月
於
北地





アカシ
長三尺許葉一丈
其形同芋之葉 獨有刺
ヲロコ人好く其の皮をむきて
喰ふ 頗る清味なる物也

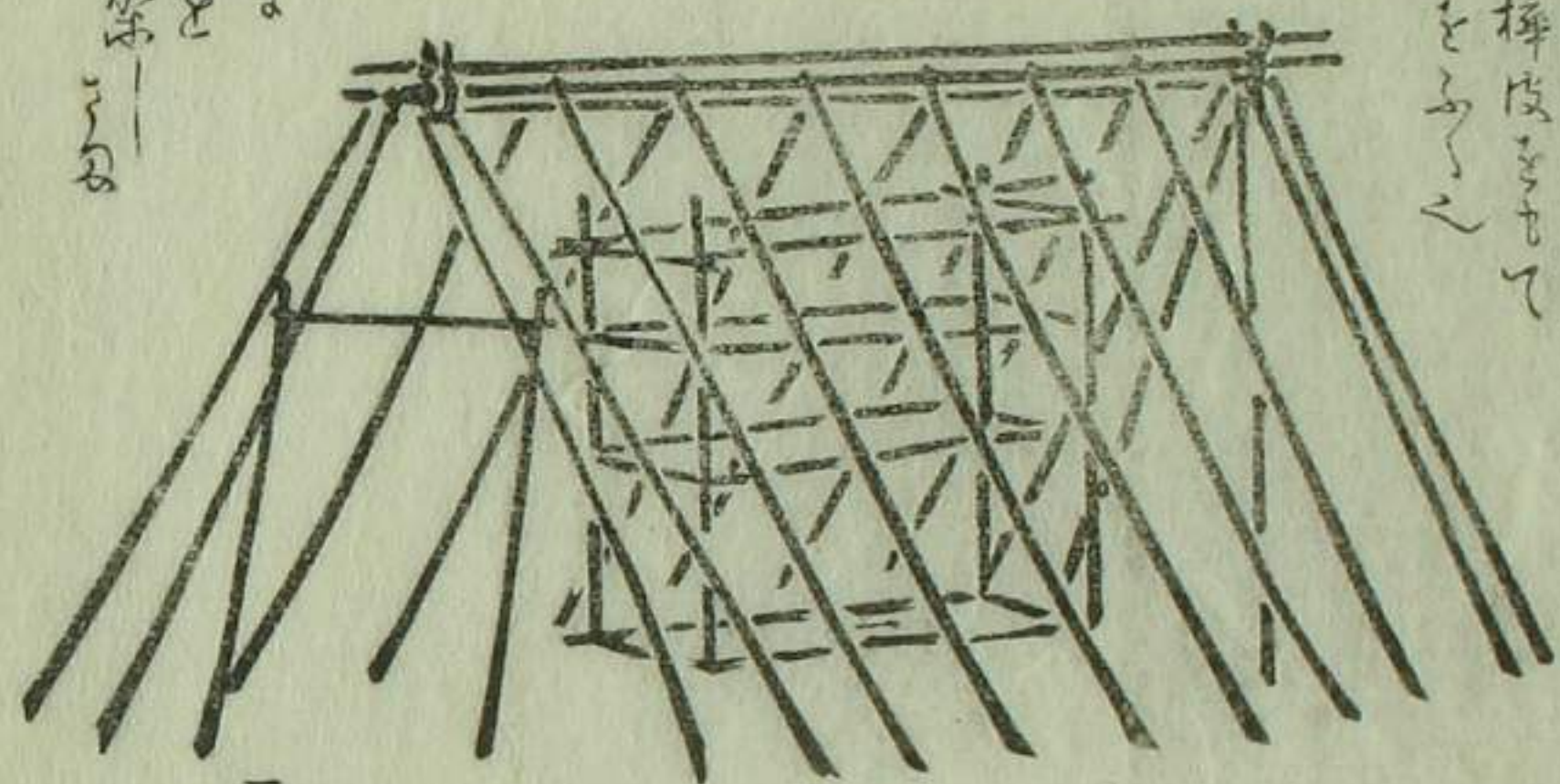
アイエンケチイ
鱈鯉と云ふ計あり



ウシケンモイセイ
其質玉々柔之

ウシケンモイセイ
其質玉々柔之

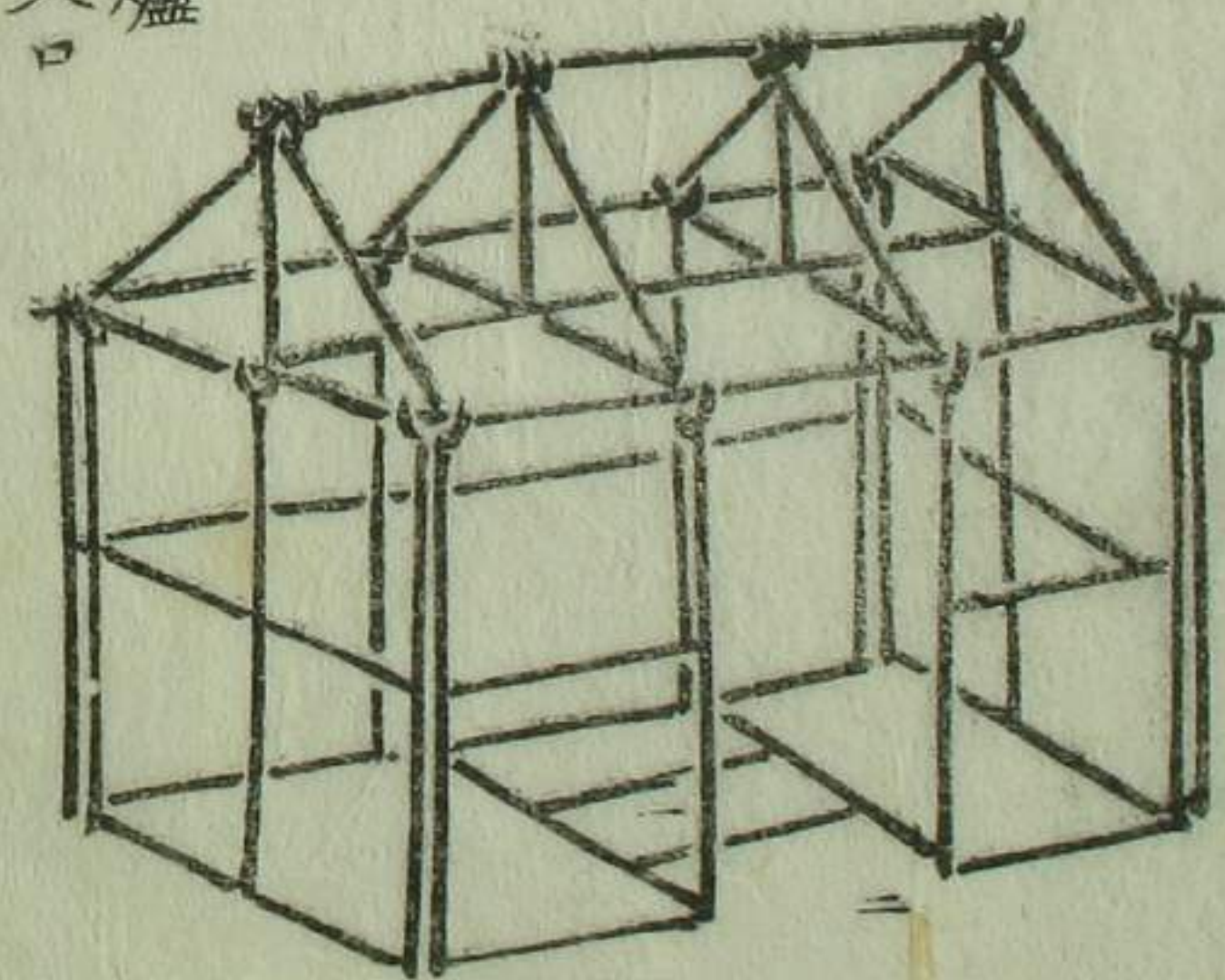
タライカ人
より本を以て丸木の架
椽皮を以て椽皮を以て
椽根を以て之



但
火棚を
架す

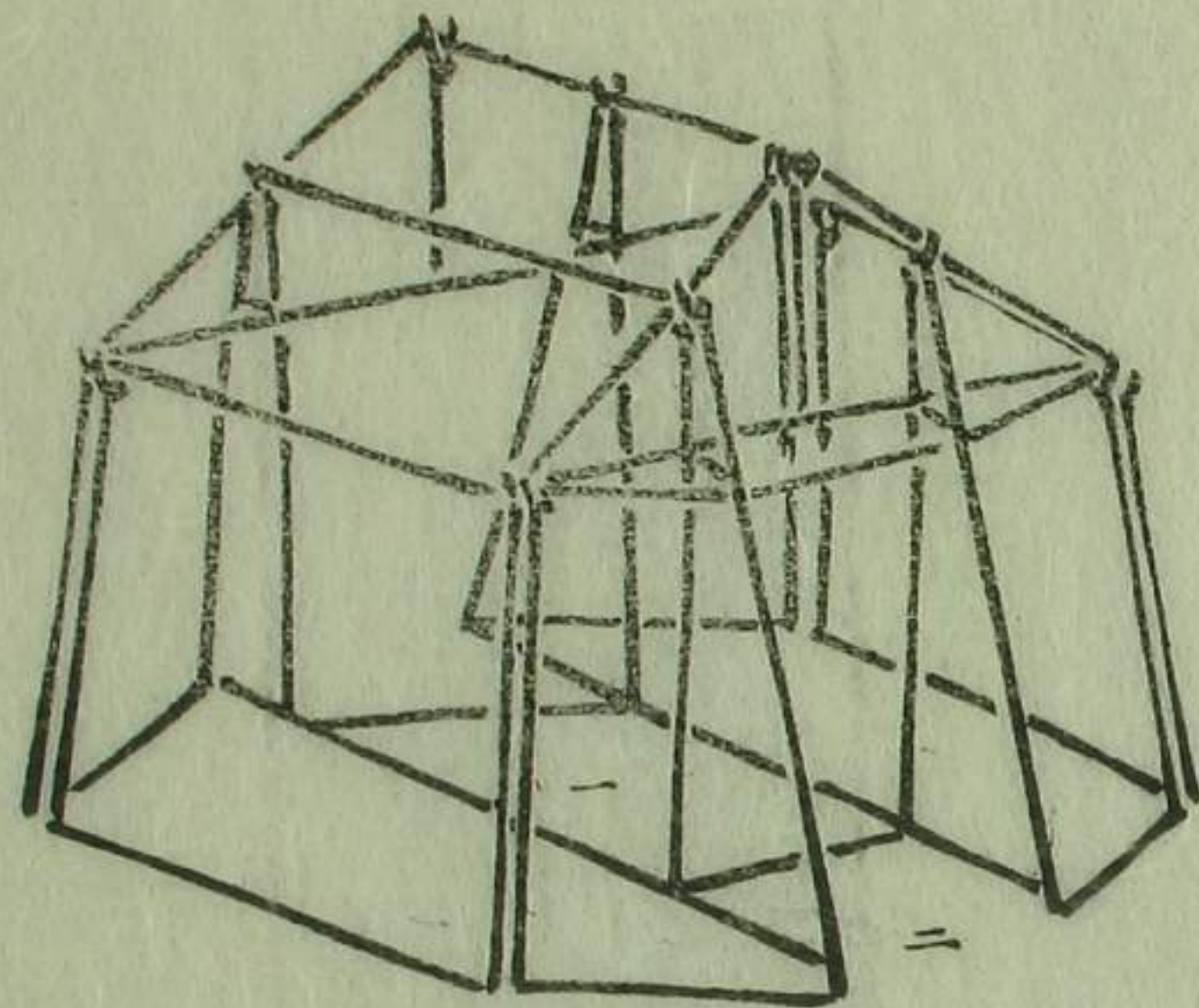
タライカ人
并奥四ヶ村家の建方
椽根を本皮を以て

入口
廂を架す

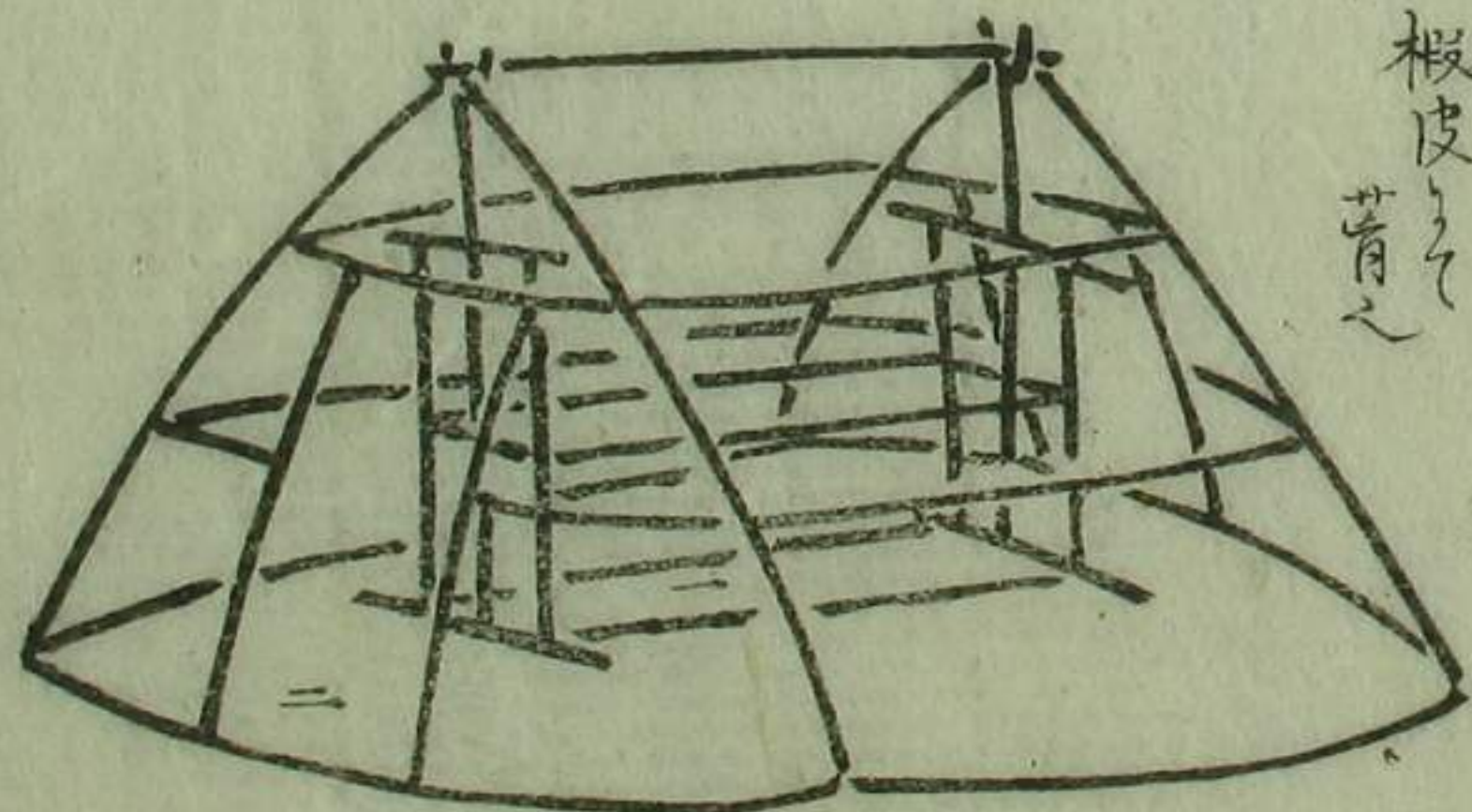


一
火爐
入口

ニクブン人家建方
椽根を椽皮之



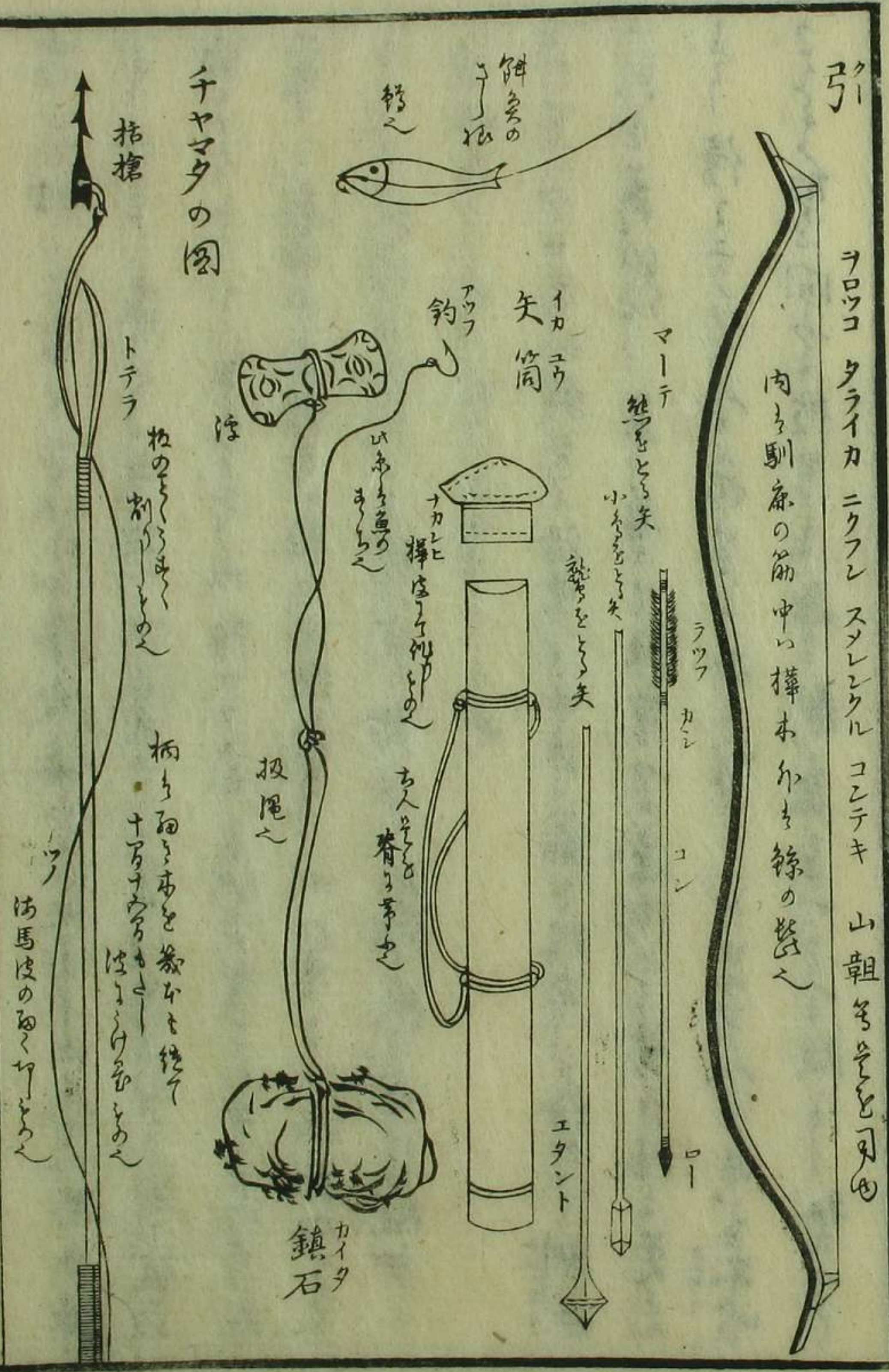
ヲロツ人家建方
椽皮を以て
椽根を以て



クロスケ直一端を所て我と云一、其極を以て垢を汲取る、
官物之是等の即智と事なれ、云々、
從サコタン
ワコタン

ニイツイ名の川、利を以て平山の間に一條の川有、
越イタライカ人二十人、
並ひ我、到るを待、
タライカ人五、
殺系、
小取、
上と各、

引



とて河内の方より小舟に艘ヨリヨコ人水釣師を移して
来ヨリ多ふは是をトマリ會所と交易し河内依て余此處にて来
りし事一淺一筆記し向ふとて殿々来りよふとて
渡し是を記して是後のお名を

風儀汀沙膠撲而天辺指顧塞雲顔洪濤洶涌翻坤軸
猶有漢獠鼓掉来

傳一立多水んとてやウクニウ構筆一牧を貫ひて我かけるれ
河内は淺かられを患ひて是々之とて山岩壁の下に依りて又
とホウ地名ノテト地名ハイカラコタレ地名キレ、地名モエ地名等越へ河内は
下千ライ名魚釣る多し海一有る凡七ハ尺も有るを

一尾なりと云ふなりんは鱸と信も鱒蛇の如くありと氣
味悪敷りの之ニニ余い ころく一とて川の有る処を

物言ひをよみて人家の在る処にありて家より何とせ
喰物を持来りて饗食する風俗と云ふなり

千ライ名を振牙語りて松前方言いふと云石狩
島一少く素多とて喰をさるの所何の内記来るとん

奥なり近の上梓の石狩記し寫生を筆を以て寫し墨を
コタレケシと云人家一軒あり妻と妾と老母と子供と十二人
あり其夫一人に寸満所の古居を居り一腹も勇壯の
男之我々を少門に善草を教へ八人の子供を一連スハ

家をおろし家の傍よりロッコ人等々出稼せしむ呼まふ事已
 奴僕のみし頗る自らの思ひに別れし物多し一
 事とれモウシニウツシ人々半と彼をふ我を以て思ふ
 地の名皆知り合ふ所より外に物を運ぶ事及ぶ大に恨み
 くと又一枚の草物トモをまきし物とて却礼し弓一張と矢
 三種と具しおぬをよりバラコウ名地千シトモウシ名地ワウニ名地へセトイタ
 イウシ昔云ふ岩壁の下をゆく波満つ時を波浪岩根をおく通
 びしそ眼をけりてこけし奥の方目と陸しとのせりし外辰の
 方より高し一匙の青山波上名地梳シをんシは是を洞つしシレトコ
 の由答ふし凡此処より直徑凡二十里位と思ふ依てまき一匙を

賦 得休と云ふの木の皮を剥く事

海霧晴時亭午風青標指點渺茫中焉知處岬是輒

背一遺噴潮撒遠空

此より遠く皆海に水と山崩崖の根林に相宜し夷言ヲチキ云
 て頬白のめき小鳥一羽驚き濡られて落ちしをウイキと云ひ
 らうと美しむ所をニウツシ人々を採り求むておぬりし度と
 ヤーシユカ人々を採り投せし物ニウツシ大に怒り礫を
 打ちまき又捕集り西へ噴し一線と云ふニウツシの野鄙な
 る事知る人々もあらずとコチヤウシ名地チ子トウナイ名地ヲチクニ
 ナイ名地エキ子ウルウシヤニ名地等々も一面の宇比名地にありし

仰一 出まきまの流を望望所まきまの能く候もまかま
八千ヨモウケ名 未口モウケ名 此いきこらフ人日々千ヤマヲ漁をわけ候
処まきまの夜も五陰を滑り候と腥血未まきまの道了有
まきまのウエシハウシ名 トマサウシ名 千カイ名 千ヤウシ名 千ヤウシ名 九つ
まきまの凡そシツカノ川場まきま

此処川中凡二万間深サ五六尋のり一高島才一の大川すまきま
余の平地之流形正南向まきま地相まきまの以灣の才一奥まきま
まきまの才一十ふまきまのアバマイトまきまのまきまの雪まきま
有まきまの川上まきまの流まきまのまきまの毛ウまきまのまきまニウア人等
まきまの候候まきまの西名のマウシ名 此まきまの二百一 出まきまの

カニツクリ
鉄口琴 とつてを同
本部ビハボンちんちん

クロツコタライカ
ニクブレの三夷名 紙を
肩まきまのまきま
まきまのまきま
まきまのまきま
情まきまのまきまのまきまのまきま
トレクルまきまのまきま
下まきまのまきまのまきま
ムツクリのまきまのまきま
引てまきま

庚申竹碎の巻
於水山山房
子守潭水飲



作巻者
曲川玉清

一依一絶一首を吐き出さずは雲のあり本に依りて

白草黄沙十里程曉来急認血痕行獵人指點射鷗处

回雲半天山雪明

雪の點也 雪の點也 雪の點也 雪の點也 雪の點也

向岩よりワロツコ人等多くヤマタを廻りて我らもをえて掉じ

まゝりく水も是等と案内し頼り東岸より越り渡り行や熟松の

木の波の悪く化し雪より一面より有る中を琥珀と接りし

上よりみ葉の松と樺木のより下川より降りて見馴れぬもの

有るは雪よりワロツコ人の墓所數十ヶ所ありて

ワロツコ人々死後其長楯より先を正す是より三尺法より七尺

信より架を傍に平りの持送り槍弓箭の極細物を立置り
雪も亦この格を高低定むり

セキセツトと申してツカカ川端に出るワロツコ人ハ形有カカ

ムリカ、ツテヤ、又マイ一見物一舟より向岩のハツタより一鉄

皮より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

雪より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

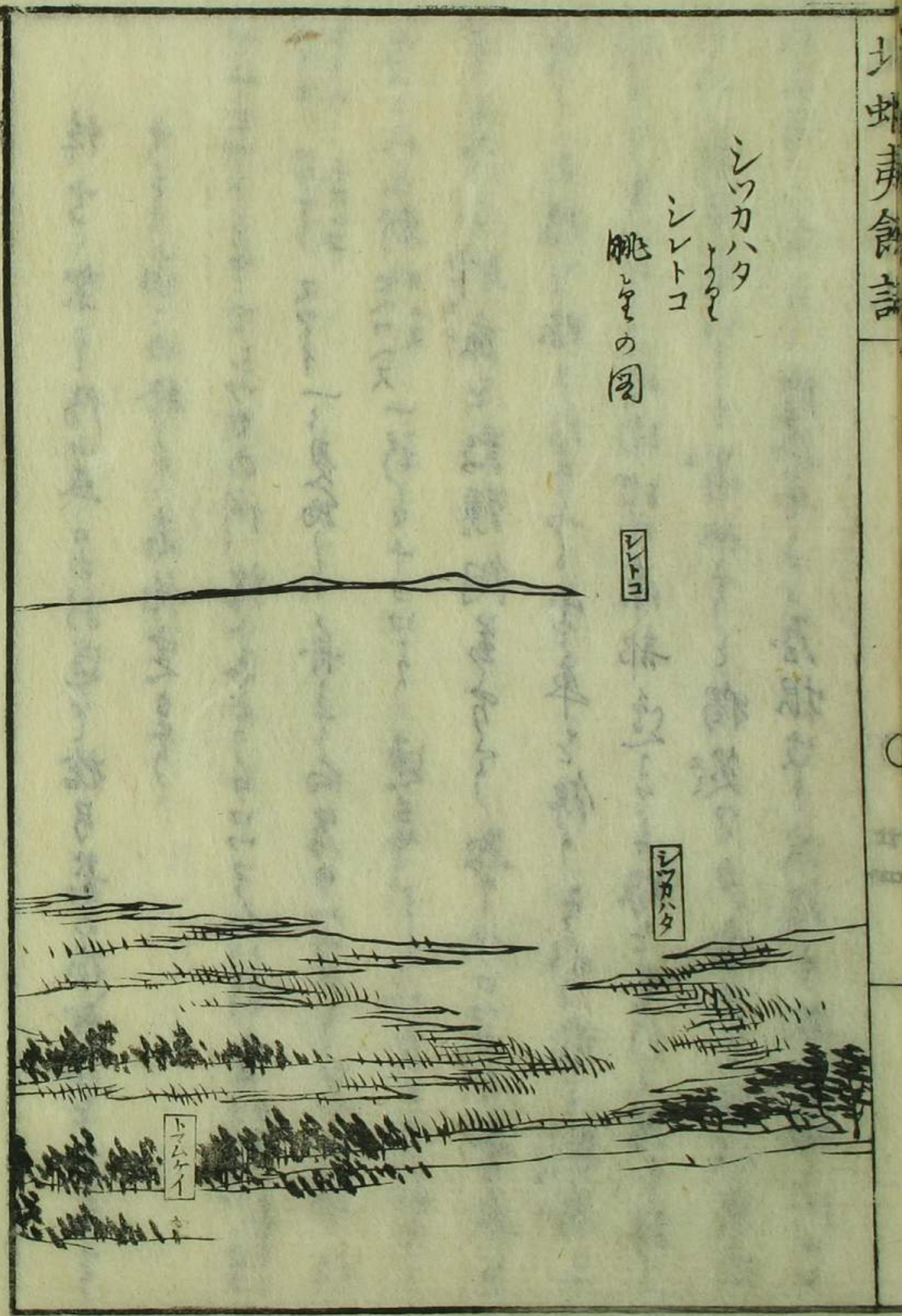
雪より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

雪より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

雪より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

雪より又三軒カニヌ一軒より十ヨロより連なるしワウエの

シツカハタ
シレトコ
眺望の図

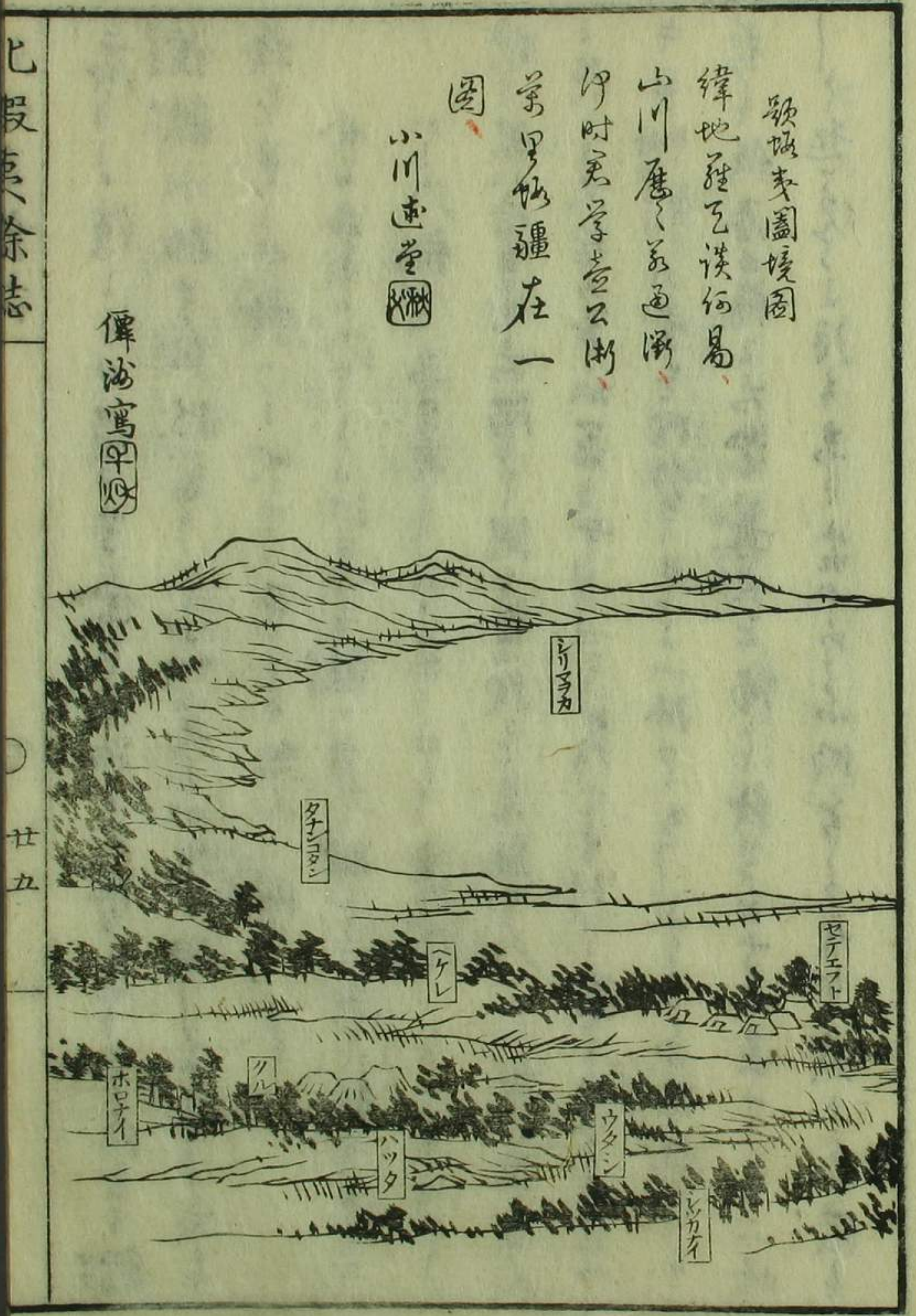


歌城表圖境圖

緯地種云漢何易
山川厲く義通漸
伊時君学壹公樹
第里地疆在一
圖

小川連堂

俣海寫早



マツリ ヤイスコヤクノ ヨスイエテ
 ヒラカチケク ワライ
 何れも縁の出るは之れ也
 いよなる湖を周廻九十七八日 四角を其地
 魚は海積水弱鏡鏡花魚鯉カシ等
 ともとの鏡は修るウエラカセと
 其のホツキ規ヒメ小貝アサリ紅ベニ様サマ有るを満面水ミツ如く
 多る能く和ニ和ニあると群ムラ居イ縁ヅミあやうく
 タライカの人別ヒトをシ七ナナ十ジュウ也ナリ人々風俗フウソク樞ス夫ハ類レ一ヒト徳トク也ナリ
 近チカ一ヒトよりシヨククラツアツのノくく繡シももとと更ニはハ婦メ人ノ多ク水ミヅ弱ヨク皮カ又
 鏡鏡カガミの皮カをシ鞆タヌキ服ヒラキ振ヒのノをシ装ツはハるルはハ夕ツキ方カタニシてシ石イシ帯オビの



夢良伊加人
 以鍋取墨
 斗之墨圖

綾岡画圖

一靖

よるホロナイ川を中を二里中の一里の体へ今レ迄の如い
廻り来るや兩岸よりラロコ教上人を先程に極楽を以て
懐の舟に挿さる川中より出逆の舟に世活り一苦ううの
と男端より宿せんを渡一頻の白雨ううとす

討到毛夷地を頭寄廬馳擔錫麁求嘆昔達夫

猶難報暮雨溟天入滿別

了都遠桑の微意を掌冊の端志一を方後の天孝之
廿二日一因のラロコ人等何色明去の必も来る所と徳を念
互言をかきせも彼も余もをのれをたすも思ふ
餘情を惜むる人一と點首して前路をゆくなり

東をアヌイより西にクシエナイ、出シラ又シラ向都て
茶溪翁。そとれ川に畧五よの也

七月二日西をクシエナイ、出隊長向山君、湯一同道して
ライチシカ^{名地}のつ橋社^信、エシモコ^名の川取の処を来酒煙
草等と有る所を先々廢去す、亦て社の前を一橋を
倒して一同の収へるをを見

、空圖の昔一泊して子振るを神谷まゝ、帳夷ふり
見一宿の所を志し、廣く張動もたると恥辱を海外に
跡をり、口惜むるも思ひ、神事あり、始の路、まを
是より何の御用と帯り、漸し又シラ名

八月七日ウヤハ陽帆一見より北海岸なるエサシモソベツヤリ
子モロアツケシ昔を思ひ東海海岸より西へ
十月十日日笠館有る名一々々々異域近一年をよこ巡
視一ゆりしは是れ是れ神の守りの若くはしゆく思ひ一
々々々々々々々々々

東討西探終一年敵未高枕始穩眠肅慎風濤流

鬼雨今宵酸夢居何邊

一絶地深處の如

北蝦夷餘誌 大尾

書松浦多氣志郎蝦夷日記後

君不見蝦夷之地距江戸二千五百程。廣袤幅負
大於内地。東南連鄂北女真。居然一區新瑞穗。厖
乎槃瓠配天妃。爾後蠢蠢長種類。被髮黥面語侏
離。純謹為風少詐偽。金礦銅礦逞逞在。海宐漁鹽
土宐藝。中古以來棄不闢。寬政嘗一講遺利。其人
則最上。近藤間宮羽太。其書則草紙分界餘錄。休
明光記。審彼遺此。各得失。未見一部全。且備往歲
大君襲職初。再置都護鎮東隅。更募高材逸足者。

北史房食言
實踐闔境撰地圖。吾友多氣志。郎應募出。竟許國
家以馳驅。臺笠戴頭。劍橫腰。涉險跋阻。如坦途。朝
攀鵲巢。暮熊窟。穀盡。茹果。果盡。魚。六月陰。曠風裂
面。三春。沍寒。冰結鬚。獵虎東去。蝦地盡。黑龍北來。
自韃胡。不出三載。盡探討。嗟呼。汝真男子。酬衆弧。
變之緯度。氣節之異同。大之山川。部落。汶港之形
區。小之黃麋。玄狐。青魚。若熊。鵬。鮭。鱒。之稅租。記來
殆如甲乙帳。爬羅剔抉。兼精粗。裒然卷。裘三百數。
至此始出大成書。誰謂徐霞客。兩戒之外。遍足跡。

山脉水源詳則詳。于天下務亦何益。多氣志。多氣
志。國家憑汝定。職貢拓區域。其功大小。與高下。相
較。奚翅霄壤隔。錢虞山云。霞客千古奇人。游紀千
古奇書。鷺子亦云。多氣志。天下有用之士。日記天
下有用之籍。

是篇往歲鷺津詞伯所贈。今錄以代跋。

庚申夏五月

松浦弘識

公孫氏正

公孫氏

公孫氏正

公孫氏

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

公孫氏正

